
空の泪

紫央

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空の泪

【Nコード】

N1882C

【作者名】

紫央

【あらすじ】

主人公夏芽とヒロイン央ひょんなことから彼女を失った主人公は三年たった今も忘れられないでいる。できるなら、死なせたくなかった…死ネタ悲恋もの苦手な方はおすすめしません。

第一話：雨

今日僕は大切な人を失いました

中3の初夏、梅雨の時期、紫陽花の中で君は眠っていた。死に化粧が傷を隠しているけれど、痛々しい傷は眠る君にふさわしくない、と僕は思った。

二度と、その目を開くことはない。

二度と、優しい声で、僕を呼ぶ事はない。

できるなら、もう一度笑って欲しかった。

最期に見た君は、この空みたいに泣いていたから。

6月23日近所の霊園に花をたむけに向かう
足取りは重い

もうあれから三年が経つ。高校卒業後、大学に進学した僕は未だに君のことを忘れられない。

まだ十四歳だった（僕は十五歳だったが）。

付き合って半年、君が壊れたあの日から、僕の中の時計は時を刻んではいけない。

中2の秋、僕らは何て事はない、普通のカップルだった。彼女から好きだと言って来て、僕も意識していたから付き合い始めた。

半年で悲しい終りを告げるなんて、夢にも思わなかった。

付き合って五ヶ月

交通事故があつた。

被害者は彼女だった。

幸い命には別状はなかったが、現実には冷たかった。

彼女が奪われたモノは

スベテノキオク

駆け付けた僕を向かえたのは悲しい現実だった。

泣き崩れる両親を横目に彼女は困った顔をしていた。

「^{ナカバ}央」

彼女の名前を呼んだが、反応はなかった。

代わりに彼女の母が僕を見て更に目に涙を溜めた。

やっと僕が存在に気付いた央は

「どなたですか？」

とやんわり聞いてきた。

やんわりした聞方が、逆に僕の心をえぐるような気がした。

「…紫堂…夏芽…（しどうなつめ）」

慌てないで、自分の名を名乗ってみた。何かを期待して。
でもその期待は脆くも崩れ去った。

「…」

央は困ったように首を傾げて、ごめんなさい、私分かりません、と
呟いた。

ショックで暫くなにも言えなかった。

病室をでて、央のお母さんが央の状態について話してくれた。

「事故のショックで自分に関わった人の記憶が全部無くなってしま
って…家族のことも、あなたのことも、みんな…もうわから
ないの」

病院を出て、止む気配のない6月の雨に打たれながら、銀色の空を
見ていた。もう泣いているのか、雨なのか、分からないくらい、全
部全部ぐちゃぐちゃだった。

歪む視界の中で、楽しかった思い出がうかんできた。

付き合い始めて、一緒にいる時間が増えて、相手を知る度好きにな
った。何気無い仕草とか、口癖、なおならないとボヤキながら、ス
トローを噛んでしまう癖とか…

死んでないんだ、いい聞かせたが、あまり効果はない。央は央でな
くなった。

昨日までの彼女は死んだようなものだ、そういう悲観的な自分も
いる。

思い出せるように手伝うくらいしか、出来ることはなかった。

それから毎日病院に通って、可能な限り一緒にいるように努めた。初めは、日に日に笑うようになっていった気がした。でも、暫くしたら、時折寂しげな顔をするようになった。

「ごめんなさい」

そればかり言う様になって、塞ぎ込み始めた。

謝ってほしいわけじゃないのに、謝らせてばかりだった。

「気にしないでいい。何か思い出せるようになった？」

「…ごめんなさい…」

「謝らなくていいから。しょうがないだろ」

「…なにも…思い出せないんです…」

「今はそれでもいいから、時間かけてでも思い出せるようになればいいだろ」

「…これからさきだって、私には見えない」

「…？」

「あなたは自由に生きて、未来もちゃんとあるけど、私は記憶がなくなつて、フラフラしたら危ないからって病院に閉じ込められて、明日さえ見えないのに…」

それだけいうと、うつ向いて泣き始めてしまった。

明日さえ見えない

強い、何らかの衝撃を受けた気がした。

第2話：紫陽花

それから、会いに行く回数が徐々に減っていった。

次逢ったら壊れてしまつかもしれない

それが怖かったんだ

壊れたら、僕にはどうしていいかわからなかった
わからないから、会いに行かなくなった

それが、今となっては大きな後悔で、あれは間違いなく僕の弱さだった

最後まで泣かしてばかりだった？

あの半年間、何を君にしてあげられた？

見舞いに行かなくなって、ただ味気無い毎日を憂鬱に過ごしていた
僕に、最悪の知らせが、届いた…

「央が病院の屋上から飛び降りて自殺した」

あの日は憂鬱なぐらいのうっとうしい土砂降りだった。
走って走って走って走って

今までにないくらい走った。

家から病院まで3km

ひたすら走った。

ペース配分なんて余裕はなく、全力で走った。

傘なんてさしてない
ずぶ濡れになっても気にしなかった。
ただ、早く。

死んだのだ、と分かるまでやたら時間がかかった。
病院について中央を見たときは、既に息を引き取った後で、痛々しい
傷はあれど、綺麗にされて眠るように横たわっていた。

なぜ自殺に至ったかはわからない。
遺書も何もなかったのだ。事故ではないようだった。屋上のフェン
スは壊れてなかったし、乗り越えていかない限りは落ちたりはしな
いからだ。

悔やんでも悔やみきれなかった。あの日だけでも会いに行けばよかった。

誰か止める人がいたなら……叶うわけもない。でも三年間、ずっと悔やみ続けてきた。

忘れたフリは、辛かった。それでも僕には明日が来るから、泣き叫び続けるわけにはいかなかった。

生きるために、何事もなかったように生活してきた。

大学に入って、本当にためになってるのか分からない講習を聞いて、ただ

毎日を過ごしていた。

悲しみの傷は癒えたわけではない。

傷の深さは、自分にしかわからない。

周りにはたぶん、もう立ち直ったのだと思っているのだろう。

そんなわけないのに

交友関係は浅いものばかりだ。月日も含めてだが、ここ三年、誰かと深く関わることを恐れている。

また誰かを失う気がして

第3話：銀色

失う怖さを知ったから、手に入れるのが怖くなって、何時しかそっけない態度をとるようになった。

そんな僕に声をかけてきたのは、うちの大学でも有名な、変な教授だった。

変わっているのとはわけが違う。

ただ、変な人と言う感じだった。

専攻は理系、科学の知識を用いて発明を行なっているらしい。

「紫堂、お前この間の本気で聞いたのか」

「ええ。」

「…研究室に来なさい。興味があるなら、教えてあげよう」

事の起こりは物理の授業。授業が終ってから、僕は教授に突拍子もない質問をした。

「教授。」

「何だね、紫堂くん」

「タイムマシンはつくれると思いますか。今の科学の力で」

「面白い質問だ。不可能に近いが、私は出来ると信じている」

「三年だけ戻るとしても？」

「つくってしまえば可能に違いない」

そのあと教授はいぶかしげな顔をして、

「変わってるなお前さんは。」

と言って高らかに笑っていた。

研究室に着くまで一言も喋らず、ただ黙ってあるいた。

「入ちなさい」

扉の先の研究室は未知の世界だった。

機械がやたら並び、本や書類は散らばり、工具も散乱していた。

その中に、一際目を引く、乗り物のような機械がどっしりと構えていた。

教授は静かに口を開いた。

「タイムマシーンに興味があると言っなら、」

「この機械についての話をしよあげようと思う。」

そう言って機械を見つめる教授の目は寂しげだった。

「ここ数十年…私が研究してきたものだ」

「これは…タイムマシーンてやつなんですか」

「そのつもりで造った」

「完成はいつなんですか」

「完成、と言っていいかわからない。近々実験を考えている」

「……僕を実験台にしてくれませんか」

「…正気かね。私は勧めないぞ。万が一と言っことも考えられる」

「例え失敗しても、しょうがないと思います。それで死んでも後悔しません。僕の生きる意味は3年前に失った」

「…未来を変えと言っより過去を変えするため、と言っわけか」
「…」

「…私がこの機械に着手した理由も君と同じかもしれんな」

思いにふけるように、目を閉じた後、静かに語り始めた。

「約40年前…私には弟がいた。身よりのない兄弟で、頼れるものはお互いのみだった。あの頃は私もまだ20代で、年が離れていた

弟はまだ十歳だった」

「明日さえ見えないような生活をして、大学に通い、弟を養うのは一苦労だった。」

そこで一息ついて、上を向いた。たぶん、涙をこらえてたんだと思う。

空はやっぱり泣いていた。誰かの思いの代わりのように

第4話：錯覚

懐かしいような、悲しいような、複雑な表情で、教授は再び語り始めた。「その日暮らしのような生活だったが、弟もちゃんとしてくれた。喧嘩もしたが割と仲は良かった。苦しいが不幸せではなかったあの生活に、突然の終りが来た」

突然の終り…

涙が出てきそうだった。

「その日私は帰りがいつもより遅かった。それでもなるべく早く帰ろうとした。それなのに」

ため息をついて、やり場のない怒りをこらえるように、深く深呼吸をした。

「あんな貧乏な家に盗みに入ってたって、何が盗れるわけでもない。だが…奴は一番奪ってはいけないものを奪っていった」

ああ、悲しみはこんな所にも…

「私と入れ違いだった。私が家に着いたとき、取り押さえる間もなく、奴は我が家から逃げていった。私が弟を発見したとき…もう、虫の息だった」

教授の頬に一筋の涙が流れた。

「少しして、弟は息を引き取った。」

僕はただ、胸が締め付けられる思いで、教授の話を聞くしかなかった。

「初めは、タイムマシンなんて馬鹿げてる、そう思い頭から振り払ったんだ。しかしどこか諦めがつかない気持が、私をつき動かした。」

「気付けばもうただ考え、そればかりになっていた。造り始めて、少しばかり楽しみが出来た。生きる意味ができた気がした。だが、気付いたのだよ。もし、もしも、成功してあちらに行けたとしても、未来が変わらなかつたら？ 弟が戻って来なかつたら…？」

騒がしい雨音が感情を掻き乱す。

泣き叫ぶような感覚が、僕の淡い希望を馬鹿にして。

「紫堂はそれでも過去を変えたいのか？」

どんなに小さな希望でもよかった。すぐるものがあれば、僕は生きられる。

「僕はそれでも変えに行かなきゃいけないんです」

確なものなんてなくて。ただ、愛おしい時間をなくした僕に最後の我儘を言わせてください。

第5話：囁

「私としてはあまり勧められないぞ。未知の機械の実験と言うものには少なからず、命の危険がついてくる」

「何度も言いますが、」

例えしょうもない我儘だとしても

「後悔はしたりしませんよ。それだけの覚悟はあります。」

覚悟と言うよりはただの悪あがきの様な気もした。

悪あがきに終つても構わない。

死なせたくなかった、伝えたいこともあった。

仮に未来は変わらなくても、伝えなきゃいけないことがある。

「あまり頼みたくないのだが…気持は痛いほど分かる。だが君には明日のその先の未来があるのだよ。それを棒にふることはない。」

「あるかもしれませんがね。でも、後悔したまま先に進めない。やるだけやったらどうなろうと構わない」

どのみち僕の時間は止まったままだ

「無責任な話だが私は責任を負えぬぞ」

「僕がどうなろうと、あなたに責任はありませんよ」

そして暫く押し黙ってしまった。

「明後日の夕方四時だ」

不意に、教授が口を開いた。

「明後日…実行に移る」

そう言った教授の目には決意の光があった。

「明後日までに僕がしておくべきことは」

「記憶を整理しておきなさい。チャンスは一度だ。間違えばもう後には退けないぞ」

「…わかりました」

ただ真つ直ぐに進むしかない。全ては君に向かっていくから、迷い
躊躇いも殴り捨てて、ただ、ひたすらに

雨は止む気配がなくて、どんよりした空色は僕の希望を嘲笑う。

次に泣くのは誰？

第6話：追憶

今まで、固く拒んできたことのひとつに、

「思い出を振り返る」があった。

思い出すのが怖くて、忘れられない一方で思い出を振り返ることをしなかった。

誰が泣くのか？そんなの僕に決まってた。

泣き叫んでも悔やんでも、何一つ納得いなくて。

でももう、

拒み続けるわけには行かない…

あの日のことを振り返るだけでよかったけど、思い出すと次々出てくる楽しかった頃の記憶。

こんなこと覚えてるなんて、女々しいかな、普通こう言うのって女が覚えてて、男は忘れちゃってるもんだろ…

秋の終りに、帰る時間が同じで二人で帰った日、さすがにもう冬も近くて、自称冷え性の央は手が真っ赤で。見えて痛々しかったから、

ポケットの中で手を繋いだ。それが、初めて手を繋いだとき。

「へ？…！びっくりした…」

「冷てー！手袋ぐらいはけよ！？」

「まだ冬物出してなくて…（苦笑）」

「ったく…」

「…でも、」

「？」

「手繋げるなら忘れてもいっかなあ…なんて。あはははは！」

「バーカ（笑）」

「ヒドイ（笑）」

結局冬の間は央は手袋を持ってこなくて、手を繋いで帰ったのをよく覚えてる。

感傷に浸ってから、本来の目的に気付いた。

あの日、央がどうしていたかはわからない。

聞いた話によれば、一時に病室を出たらしい。

その後四時過ぎぐらいに飛び下りるのを目撃されている。向かうな

ら二時ごろか…

第一何時間あちらにいろかわからない。

伝えたいことが沢山ある。

ぼんやり、あの日は雨が降っていたから、傘がいるかな、なんて考

えたりしていた。

どうして央は雨の中屋上に行ったんだろう…

傘ぐらい持っていけばよかったのに

何でわざわざ、雨に打たれにいったんだろう…

第七話：白日

そしてついに、待ち望んでいた日がやって来た。

待ち望んでいたはずなのに

何故か怖くて

「本当に行くのかい？」

教授の質問には今までより重みがあった。

答えなんて決まってる

「ええ。行かなきゃ行けないんです」

そう、それが無駄に終わるうとも。

この命がつきようと。

「私の希望全てを君に託すのは、重荷過ぎるが、それくらいの夢をのせて、君は旅立つのだな……」

辛い表情でも、その目は真剣で。

「教授、くだらない戯言に付き合ってくださいありがとうございます」

「それはお互い様だ。私の戯言にのってくれたのは君だし、君の戯言にのったのは私だ」

夢のような戯言を背負い、過去へ飛び立つ未知の機械に、足を踏み入れた：

「いいかね、紫堂君。この機械が成功しても、あちらには三時間が限界だ。三時間したら、戻りなさい」

「わかりました。」

機械音がして、重い鉄の扉が閉まる。

向かう先は“君”

目が回るような感覚がした。吐気さえした。

目をギュッとつむって、見ないことにした。

グルグル

グルグル

グルグル…

ふと、瞼に水滴が乗った気がして、目を開いた…

ぼんやり、白い世界に、佇んでいるのは、見間違うはずもない、愛しい君だった。雨の雫が視界を霞ませる。今にも消えそうな君の心みたいに、空から降る泪は、止む気配がなくて。

その小さな体でどれだけの重荷を背負っていたの？

第8話：鎖

もう既に、フェンスの外にいた央。

僕らを隔てているのはこの金網の壁だけで。

それなのに。

何故かとても分厚い障害にも感じられて。

「…央」

名前を言うのがやっとで、なんて言ったらいいかわからなくて。
驚いて振り向いた央。

「な…っ…」

「なんで…こんな…雨の中…傘…ぐらいさせよ…」
声が震えて言葉にならなくて。

「それは…お互い様でしょう？」

「危ないから、こっち戻ってこいよ」

「…」

央はただ、首を横に振るだけだった。

「もう終りなんだよ」

央が呟いた。

「私は私で終りにするの。」

「どういう意味だよ」

「もう誰かの悲しむ顔みたくないから、私がいなくなれば、そのときの痛みは大きいけど、傷はいつか癒える」

「癒えるかどうかなんて、お前にわかんねえだろ！」

「わかんないけどっ簡単な考えで、軽い気持で決断したんじゃない

「こんな終りかたしか出来ないけど…私にはこうすることしか出来ない」

大粒の泪が、空から。

央の目からも溢れていくけど、僕にはどちらも止められなくて。

何でこんなに締め付けられるんだ。

なにがそんなに、泣きたいんだろう。

「泣いてばかりでごめんなさい…」

泣いているのに、しっかりした声で言葉を紡ぎ、真っ直ぐな目で僕を見据えて。

「悲しい…思いをさせてごめんなさい…思い出せなくてごめんなさい…」

そこまでいって、泪が溢れてくるのが止まらなくて。

「私のために泣いてくれて、」

ありがとう

「死なせたくない。」

消えそうな彼女を繋ぎ止めるためにでた言葉は、当たり前で、かつ、伝えたかったことで。

「何があっても、俺を忘れないでほしかった」

驚いた央の目には泪が。

溢れて、雨になって…

「こんなに、誰かを愛したことはなかった」

「央だけは何があっても信じる自信があった」

頬を伝う雫が、泪なのか、雨なのか、もうわからなくて。

「失う辛さが、決して必ず癒えるものではないと知った」

「癒えるものじゃないんだ。失うものが大きすぎれば、傷だって大きいんだよ」

「でも…私には、」

「生きることが苦痛で、生きること誰かを傷付けてしまうから…」

「そんなこと…」

「わからないでしょう？私の苦痛なんて…泣き続けて、泣かせ続ける人生なんて。それなら私は私を終らせたいの」

残された者の気持を考えてないわけではないけれど、悲しい顔を見たくないから、どうにかしなきゃいけないくて…

「もしも」

央が振り絞るように発した言葉は、白い世界に響きわたった。

「次会ったなら、絶対」

忘れないから

最終話：終焉

微笑んで、

さよなら

たった一言を残して君は、また僕の前から消えた…

気だるい白い世界で佇んで、ただ雨に打たれていた。また止められなかった…

止められなかったけど、何でか、不思議となにもなくて、伝えたかったことを伝えられたことには、満足していた。
納得、とはまた違うけど、納得みたいなかんじ…

結局、央の決意は僕がどうこう出来るもんじゃなかった。彼女は彼女なりの考えで、僕の前から消えた。

伸ばした手は、虚しく空を斬った

また渦が帰ってきた

グルグル

グルグル

グルグル…

やがて、機械音がやんで、鉄の扉は“今”を告げた

ぼやけた視界に、見慣れた研究室

不意に声がした

「…満足したかね…？」

「…また…僕は…止められませんでした」

「…」

「でも」

「でも？」

「僕の中の央の最後は変えられました」

「…どんなふうによ？」

「いつも泣かせてばかりで、最後まで泣かせてたけど…笑顔だった…
…凄く優しい、僕が好きだった笑顔で、さよならだった…」
視界が歪んで、滴が落ちた。僕が泣いていたのか、空の泪なのかは、
わからない…

もし次君に逢えるなら

ありがとうをたくさんと

愛しているを一つ、

捧げよう

二度と泣かないように。

笑顔を絶やさないように。

君に沢山の幸せを…

わかりあうことも

慰め合うことも

伝え合うことも

ままならぬまま

ただ君を

真っ直ぐ愛していました

いま

君に伝える言葉は

ありがとう

最終話：終焉（後書き）

やっと終わりました！当初のイメージとはかけ離れてしまいましたが、まあ満足してます。ここまで読んでくださり、本当にありがとうございます！
ざいました！ another storyとして央視点の番外編も書く予定なのでよろしければどうぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1882c/>

空の泪

2010年11月25日17時53分発行